

時代を超えて光り輝く“ 稲むらの火 ” 「 広村津波図 」

紀州広村、現在の和歌山県広川町広は、太古の昔より地形の如からしめるところか、しばしば地震による津波の来襲を受け、その度に壊滅的な打撃を受けてきた。なかでも宝永7年（1707年）、M8.4の激震で波高14mの津波が押し寄せ、死者300人近い犠牲者を出した。爾来、この村の人々は地震の後の津波来襲を恐れ、いち早く高台に避難することを代々言い伝えられてきた。

安政元年（1854年）12月23日午前10時、「安政の東海地震」が発生した。村人がいち早く高台に逃げ、一夜を過ごしたが、この地震による津波の被害はなかった。この地震が引き金になって翌24日の夕刻「安政の南海地震」が発生した。

千葉県銚子から、ふる里広村に帰っていた郷土の偉人濱口梧陵は、この地震に遭遇。「この激烈なこと前日の比にあらず」と手記に書いているが、想像を絶する大地震が近畿、四国、九州東部に及んだ。

津波来襲を予見した梧陵は、村人をいち早く高台に避難するように指揮。

やがて夕やみ迫る広村に、8mの高波が直撃。村を囲う広川（図の左側）と江上川（図の右側）を激流が逆流し、村人の避難路を塞ぐとともに、逆巻く高波は一瞬にして家屋をなぎ倒す。道路や橋を流出し、田畑の上を一掃した潮流は忽ちにして村全体を泥沼にした。暗夜にさ迷う村人にとっては、正に地獄絵。宝永地震津波から147年。初めて体験する津波の恐怖に、只々おののくばかりであった。

この第1波の激流の中で、濱口梧陵は身を挺して村人を助け、ようやく高台に避難。ごった返す広八幡神社に来て見れば、未だ見えぬ家族の安否を求める悲鳴は騒然として、正に「鼎の沸くが如し」と。梧陵は、今なお逃げ遅れた村人を救うため、再び若者十数人を従え、^{たいぼつ}松明に火をつけ、田んぼのすすき（稲むら）に次々と火を放ち、避難の道標とした。この火の明かりで無事高台に避難出来た村人は少なくなかった。

この壮絶な状況を、ちょうど隣村（湯浅町栖原）から見て描いたのは、文人・画家の古田咏処氏の「広村津波図」で、今も広川町広の養源寺に保存されている。激流が数回にわたって押し寄せせる中を、天をも焦がす稲むらの明かりを頼りに必死になって広八幡神社の高台に向かって避難する村人の様子が、迫真をもって描かれている。写真のなかった当時であるだけに、迫力ある貴重な津波図である。

一夜明けて変転した広村の惨状は正に目を覆わんばかり。梧陵の活躍はむしろこれからで、今でいう「災害対策本部長」として、東奔西走、自らも米200俵の抛出をしながら数日間1,400人の飢えをしのいだ。家屋や家財の整理、管理、道路の復旧作業の指揮をはじめ、私財を投じて家屋50軒を建て、困窮者に無料で居住させるなど、数々の献身的な活動が続いた毎日であった。

梧陵は、広村永遠の安全を確立しようと、安政2年、大堤防建設に着手。この工事は、また村人に職を与え、離村を防ぎ、労賃を日払いにするなど、梧陵の非凡な行政手腕が発揮された。約4ヵ年の歳月をもって、全長約600m、高さ5m、人夫延人数56,736人、その費用、銀貨94貫344匁、その殆どを梧陵の私財でまかかった。

昭和21年（1946年）12月21日の深夜、昭和の南海地震が発生、波高4mの津波が来襲したが、民家への直撃をこの堤防は阻み、被害を最小限に食い止めた。

安政の津波来襲から今年で149年、ここ広川町では全国でも珍しい「津波祭」を実施している。津波来襲における濱口梧陵の人間愛・郷土愛に燃えた、犠牲的・献身的な救命活動と村の復興への情熱は、正に地域防災の原点であり、今後も時代を超えて「稲むらの火」は光り輝くであろうし、また燃やし続けなければならないだろう。

清水 勲

（しみず・いさお 広川町中央公民館館長）



嘉永七年
十一月五日
廣津浪之間



広村津波図
(養源寺所蔵 和歌山県広川町役場提供)